報告1

東日本大震災と関連資料の収集
―福島県の取り組み―

柳沼 賢治（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター・特任教授）

1　地震とそれ以降の経緯

2011年3月11日午後2時46分に、東北地方太平洋沖地震が発生しました。この地震をきっかけにして生じた災害を一般に「東日本大震災」と呼んでいます。福島県の太平洋沿岸部では、地震の後に津波が押し寄せ、福島第一原発では外部電源・非常電源を喪失し危険が迫ってきました。そこで第一原発の半径2キロ圏内、その後半径3キロ圏内の住民に避難指示が出されました。3月12日には、第一原発1号機の建屋が水素爆発を起こしたため避難指示区域が半径20キロ圏に広がりました。さらに14日には3号機建屋が、15日には4号機建屋も水素爆発を起こしています。

福島第一原発の事故後、2011年4月22日に図1のような避難指示区域が示されました。この図の中で赤い部分は人が入ってはいけない警戒区域でした。現在は、2017年4月1日に示されたもので（図2）、第一原発から北西に帯状に赤い部分が帰還困難区域、その周囲に居住制限区域や避難指示解除準備区域などが設定されています。なぜ原発の北西に帰還困難区域が設定されているかといいますと、当時の風向きによって北西方向により多くの放射性物質が飛散したためです。避難指示を受けて原発周辺自治体の住民は、主に県内各所に避難しましたが、双葉町の場合は埼玉県のさいたまスーパーアリーナ、さらに加須市の旧県立騎西高校に避難しました。

このように、福島県における東日本大震災とは、地震、津波に加え、原発事故による直接的な被害とその後の風評被害が重なった、現在進行中の災害である点に大きな特徴があります。かつての何気ない地域が、「あの日のまま」と「復興途上」そして「平常」が混

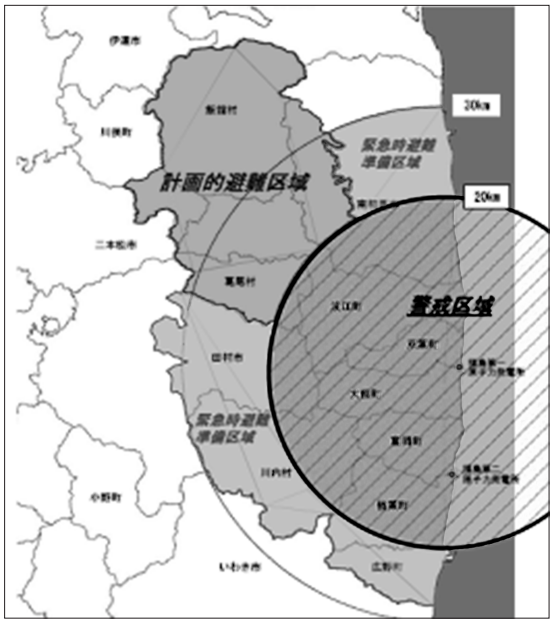

図1　平成23年4月22日付け避難指示区域
（福島県ホームページより）

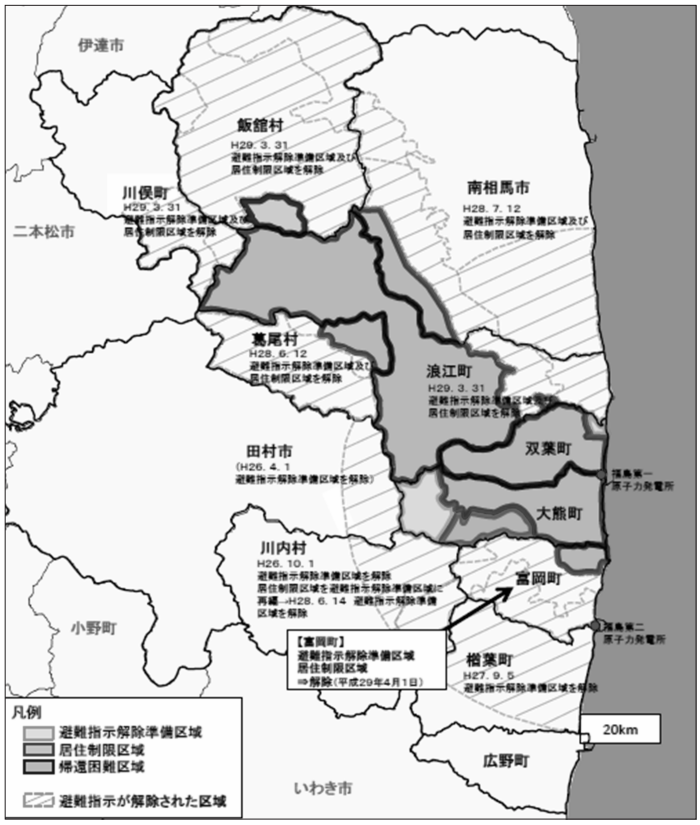

図2　2017年4月1日付け避難区域
（福島県ホームページより）

在する不均衡な景観になっていると言えます。

ここでは、それら一連の震災に関連する資料収集の取り組みと若干の課題を示したいと思います。

２　震災関連資料収集の取り組み

「ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会(事務局：福島県立博物館)」は、2014年度から2016年度までの3年間、特に浜通り地域の震災関連資料を精力的に調査・収集しています。被災市町村の関係者等を交え組織だった収集としては初めてのことで、津波で潰されたモノ、押し寄せてきた津波の高さが分かる泥の付いたカーテンなど、失われる可能性の高い初期の出来事を検証する上で重要な資料が収集されています。

次に、富岡町は、2017年4月1日に避難指示が解除された町です。町内のいわゆる文化財をはじめ被災を物語る資料を収集しており、現在、これらを収蔵・展示する震災アーカイブ施設を2020年度に開館する整備が進められています。富岡町の収集資料の中には津波で潰れたパトカーがあります（写真1)。警察官2人が交通整理をしていたところ、津波に飲まれて1人は行方不明、1人が遺体で発見されました。直前まで二人が乗っていたパトカーの保全方法についても検討されているようです。

3番目は双葉町です。双葉町は、第一原発の5号機と6号機が立地する町で、全町避難中です。埼玉県に避難していましたが、そのときに使用・作成された資料が、筑波大学の白井哲哉さんと連携して収集されています。また現在、町に残っている資料については福島大学と連携して収集しています。



写真１　富岡町収集のパトカー

4番目に大熊町です。第一原発1号機から4号機が立地している町です。ここでは、2019年9月に大熊町アーカイブズ検討委員会が発足し、収集基準や行政文書の評価選別、アーカイブズ施設のあり方などが議論されています。震災記録誌を作成した際に収集した資料や行政文書等の保存について踏み込んだ検討がなされています。

5番目は楢葉町です。ここは、2015年9月5日に避難指示が解除されました。比較的早い時期に避難先から戻った町です。私どもと連携して情報を共有しながら収集・保存に取り組んでいるところです。

次にいわき市ですが、福島県浜通りの一番南にある市です。ここでは震災の記憶や教訓を確実に伝承する施設として「いわき市震災メモリアル中核拠点施設」の整備に向けて、基本計画を策定しました。

次は郡山市です。ここには富岡町と双葉町と川内村の3つの町村が避難していました。それらの資料を含む「郡山震災アーカイブ」をネットで配信しています。

次に福島県の取り組みについてお話しします。福島県では、「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設」の整備を進めているところです。浪江町と双葉町にまたがって整備される復興祈念公園に隣接して建設される予定です。2月9日に安全祈願祭と起工式が行われます。この施設に収蔵・保管する資料の収集は福島大学が受託し、現在、収集の途中にあります。この施設の展示は、震災による地域の変貌を知るために必要な地震前、そして地震、さらに津波等の資料を扱いながら、福島第一原発の事故による被害とその対応状況と復興への挑戦というような構成になるようです。

最後に、東京電力によって2011年11月30日に富岡町に廃炉資料館がオープンしたことを付け加えておきます。今後、永く続くであろう第一原発の廃炉に関する情報発信施設です。

３　福島県の現在

ここでは、現在の原発周辺の様子を見ていただきます。まず、大熊町と双葉町周辺のメーンストリートの国道6号線沿いですが、家々の入り口は柵で塞がれています（写真2)。帰還困難区域ですから、立ち入

り禁止の印です。また、道路を走っていると、イノシシとの衝突を注意喚起する立て看板があります（写真3)。もともとこの看板は「牛」との衝突を避けるためのものでした。牛農家の方々が、飼い主の避難にともない牛舎で飢え死にさせるのは忍びないという理由で外に出してしまう事態が生じました。そのため、野生化した牛とぶつかる危険が出てきたのです。ところが、最近は牛もいなくなり、人が住んでいない帰還困難区域にイノシシが増えました。そこで、「牛」の文字の上に「猪」という文字を貼ったわけです。時の流れとともに変化する原発災害の一面を示す資料として、ぜひ収集したいと考えています。

国道6号線沿いの帰還困難区域には、朝9時から夕方5時の間でないと入れないという案内看板があります。ここに入るには県や町から通行許可証を発行してもらい、検問でそれを提示して入ります（写真4)。大熊町では、帰還困難区域の一部を復興拠点と位置づけ、除染して町役場や住宅を建設し、役場業務が2019年5月に建設中の新庁舎で始まるとのことです。以上のように、一言で震災関連資料といっても、地震が起こり、津波が来て、原子力発電所が爆発し、避難して、風評被害があって、復興途上にあるというように、福島県の震災関連資料は長い時間軸で捉えなければならなりません。また､各自治体の復興への歩みも、震災の爪痕が決して大きくはなかった地域から、未だ立ち入りができない地域までというように大きく異なっています。



写真２　国道６号線沿いのバリケード



写真３　注意喚起の看板

４　震災以前の地域を伝える資料

それでは、東日本大震災に関連する先の出来事ごとに沿って、調査で知り得たあるいは収集した資料を見ていきたいと思います。

「地球にやさしいエネルギー原子力　人にやさしい大熊町」と書いてある看板（写真5）は、大熊町の大野駅に立っているものです。この看板は、震災前の大熊町と原子力発電所との関係を知る貴重な資料で、この町を象徴する看板でもあると考えています。最近、この看板が撤去されるという情報を得たため、私ども



写真４　帰還困難区域へのゲート



写真５　大野駅構内の看板

に寄託していただくことになりました。

福島第一原発のある大熊町や双葉町には、重大な事故を起こした原子力発電所の存在を否定する人ばかりではなく、今でも、原発のおかげで町の財政基盤が安定したことや、地元に雇用が生まれ、一家の大黒柱が出稼ぎに行くこともなくなったことへの感謝の気持ちなど、複雑な胸の内を整理できないでいる方々もいます。

2点目は、大熊町の県立大野病院にあった東京電力提供のニュースタンドです。それから、大熊町の街角にあった「アトム観光」（写真6）という名前の観光会社です。現在まで原子力発電所と非常に密接な関係をもってきたのが大熊であり双葉です。

震災前を伝える資料の一つに、ある集会所の一画にあった避難場所の案内看板があります。この集会所は指定の避難所だったため、一時避難した人もいるのですが、津波が発生して危険なため、別の場所に移動したということです。津波の注意喚起看板は寄託していただきました。私どもで収集している資料は寄託していただいたものが少なくありません。

5　地震・津波被害を伝える資料

ぐにゃぐにゃと曲がった側溝のグレーチング（写真7）や、津波で流されて潰れた消防車（写真8）があります。この消防車には平成17年度電源立地促進対策交付金による購入であることが記されています。また、地震発生の午後2時46分で止まった時計もあります。3月12日に避難することになった病院では、玄関近くにストレッチャーがあり、救急患者の受け入れをやっていたということが分かります。病院の奥に行くと緊急対策本部に、電源がなくなった時のためのろうそくが置いてありました。「東日本大震災巨大地震」という3月12日付けの新聞も置かれています。

6　原発被害を伝える資料

富岡町の方々は一時、川内村に避難しています。その後、川内村の方々と一緒にさらに内陸の郡山に避難することになりました。川内村のコミュニティセンターの調理室で、川内村の婦人会の方と富岡町の方々が一緒におにぎりを毎日数千個作り、近くの避難所に配っていました。避難所を移動することになった時に、川内村の方々が一足先に出たので富岡町の方々は直接お礼を言うことができませんでした。そのため「第二のふるさとになりました」（写真9）、「川内村の皆様へ　このたびは本当にお世話になりました」、「川内村の皆様　温かい方ばかりでたくさん元気をいただきました」などと黒板に書いて、郡山市の避難所に向かったとのことです。黒板の文字はずっと残っていたのですが、文字の劣化が懸念されたため、黒板をはがして寄託してもらい、代わりにレプリカをはめこんで、当

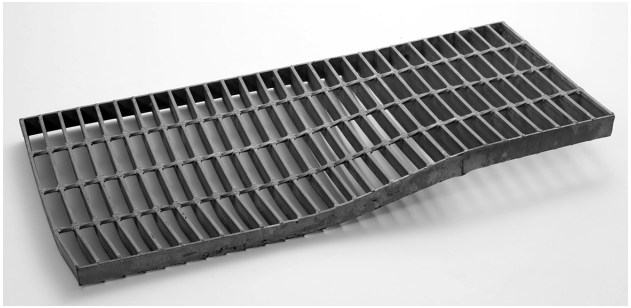

写真７　地震で歪んだ側溝のグレーチング



写真６「アトム観光」



写真８　潰れた消防車

時のまま元の場所でも見ることができるようにしました。

楢葉町の小学校では、2011年の秋に、一度生徒と生徒の親に自分の荷物を持っていく機会を与えています。そして一次立ち入りをしたときのまま教室が残っていました。黒板には「地震なんかに負けるな」と書いてあります。注目されるのは、机の上や黒板、壁などに、放射線量を書いたシールが貼ってあることです。生徒たちを教室に入れるかどうかの判断材料とするためです。机一つ一つに記された放射線量値が違うので、27人分の机と椅子を持ってきました。興味深いのは、全てシールの端が折り返してあることです。これは近い将来、はがす予定だったということですが、とうとうはがす機会はなく、学校は取り壊されました。

浪江町の酒屋さんは、津波で流されました。2011年7月頃に一時立ち入りしています。この方は、日記をつけていました。また罹災証明書があります。この方の旦那さんは奥さんと連名で東京電力に個人的に賠償請求をしています。転居先を知らせる手紙もあります。浪江町長名で発行された臨時通行証の内の1枚は、千葉に嫁いだ娘さんが町に入るときのもの、残り2枚は、8月のお盆と9月のお彼岸に町に入るために発行してもらったものです。先祖とのつながりが町とのつながりでもあることを教えてくれる資料です。

第一原発の近くには原子力センターとオフサイトセンターがあります。原子力センターは、県内の放射線量をモニタリングポストで計測し、原子力発電所を監視する組織です。オフサイトセンターは、原子力発電所で何かあったときに駆けつけて対応に当たる施設です。オフサイトセンターには、経済産業省、自衛隊、市町村、いろいろな人たちが入っています。第一原発が爆発し危険だということになって、オフサイトセンターと原子力センターとで行ったり来たりし、情報をやりとりしていました。オフサイトセンターでは電源が喪失し、衛星電話が一つだけが通じたという状況でした。そこで、原子力センターに皆が集まって会議などもしました。原子力センターの入り口には、脱いだタイベックスーツが袋に入っています。放射線量が高いので持って来られないため、まだ置いてあります。

7　復興を伝える資料

復興を伝える資料も徐々に出てきています。写真10は昨年度の富岡町とみおかロードレース大会の様子です。福島大学の教員も一緒に走りました。それから、JR富岡駅です。富岡駅は津波で駅舎が流されましたが、今は新しい駅舎が完成して運用されています。

福島では多くの機関がそれぞれで震災関連資料を収集しています。一元的な収集と保管が望ましいとの意見もあろうかと思いますが、町には町として思い入れの強い資料がありますし、県は県内の出来事という視点で選択し収集しています。震災関連資料はまだ体系化されているわけではないため、異なる機関がそれぞれの立場や視点で収集することにより、収集資料のこぼれ落ちを防ぐというメリットもあるでしょう。このように考えてくると、今の福島で行われている収集の形は非常に良いことだと言えそうです。ただ、将来、それぞれが収集した資料を共有し活用の幅を広げていくには、連携を深めていく必要があるのではないかと思っています。

以上で私の報告を終わります。

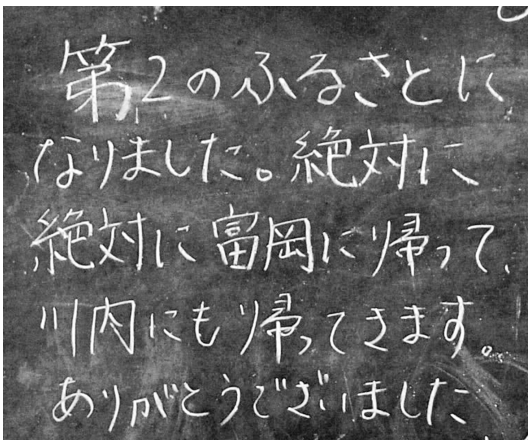

写真９　川内村の黒板に書かれた感謝のことば



写真 10　とみおかロードレース